

■筑波大付属高進学

秋篠宮家の長男悠仁(15)がこの春から筑波大付属高校で学ばれている。前例のない皇族男子の同高進学には異論もあつた。在学中に成年を迎え、注目を集めることになる「未来の象徴天皇」の進路や教育をとりまく背景を探った。



編集委員 沖村 家
●皇族男子の教育を巡る経緯 (近代以降)

1877年(明治)	華族教育のため、現在の学習院の前身「華族学校」創設。宮内省所管の官立学校になる(84年)
1926年(大正)	皇族就学令公布。皇族は6~20歳に普通教育を受け、原則学習院に通うと定める
1947年(昭和)	学習院の私学化、華族制度廃止、11宮家の51人が皇籍離脱
1988年	天皇陛下が学習院大学院博士前期課程修了、秋篠宮さまが同大卒業。学習院での就学最後
2006年(平成)	悠仁さま誕生(9月6日)。秋篠宮さま以来41年ぶりの皇族男子
2013年	悠仁さま、お茶の水女子大付属小入学。学習院初等科以外入学は19年
2022年(令和)	民法改正ですべての皇族が18歳で成人するとに(4月)。悠仁さま筑波大付属高入学

悠仁さまの学び 理解広めて

自ら希望

「興味や関心を持っていることをさらに深めた」。悠仁さまは高校入学の抱負をこう語られた。生き物好きで知られるが、中学生で既にトンボの「はね」を昆虫類の器官を示す「翅」と書かれていた。日頃の勉強ぶりを、常用外の「好奇心が旺盛で、常用外の漢字でも本来の用法を調べられている」と明かす。

父親の秋篠宮さまも「探究心」を公務の支えとされてきた。名着総裁を務められている「日本水大賞委員会」の委員進士五十八・東農大名管教育院 一つの進路

授は「理学博士として深められた知識があり、生物、農業、環境、防災と幅広い活動を、的確なお言葉でたえてくれた」と話す。

悠仁さまは進路の資料を調べ、卒業生の話を聞き、「自由・主・自律・自由」を抱ける筑波大付属高を希望された。秋篠宮さまの知人は「祖父の上皇さまが重視された象徴のあり方の模索にも資する選択だ」と受け止めたという。

を満たす成績だと説明しても「5年前に制度ができたのは悠仁さまのためだ」とうたった見方がネットで広がった。「一般受験される」と臆測が流れた当初は「皇族が一般国民と競争するのか」と先走った批判もあった。

皇室の公平平等性にもまず配慮し、他の皇族男子に做つて学習院で学ぶべきだという意見があるが、皇族教育をとりまく環境の変化にも留意すべきだろう。

天皇陛下に高校入学の報告をするため、皇座に入られる悠仁さま(4月9日、東京都千代田区で)＝写真：藤本 太郎撮影



- ◆皇位継承者の教育を巡る発言(要旨)
- 「(天皇陛下の教育を担う) 参加がほしいが宮内庁は必要ないという考えだった。象徴学はいろんな材料を与え、それをいかに咀嚼(そしゃく)していくかが大事」(1976年上皇さま)
- 「花園天皇がまず徳を積むこと、そのために学問をせよと説いたことに感銘を受けた。学問とは単に博学になるだけではなく、人間として学ぶべき道義や礼儀も含む」(2010年天皇陛下)
- 「(悠仁さまが) 関心のあることを深めていってくれば」(08年秋篠宮さま)
- 「長男には様々な地域に自分で行き、文化や生活の習慣を見て、人から話を聞き、理解を深めてもらいたい」(17年同)

分にかかわらない教育を抱けた。そこで学ばれた秋篠宮さま以来、41年ぶりに生まれた皇族男子が悠仁さまで、学齢に達した時、学習院を「唯一の進路」としなければならぬ理由が失われていた。

青年期の上皇さまの教育は、元慶徳塾塾長小泉信三博士が「東宮御教育常時参与」として支えたが、今の天皇陛下にそうした参与はつかなかった。常に皇族に任せ、その教育を担うような人材は

得難くなり、皇族も一般国民のように学校で人格や見識を磨く時代となって久しい。最良の進路を求める努力を理解してほしい」と秋篠宮家の側近は訴える。

選択の説明 暖昧

前例のない高校を選んだ理由を「本人の志望」「学校の教育方針」「有識の方々の意見と曖昧な言葉でも説明した宮内庁の姿勢にも疑問が残った。小田部雄次・静岡福祉大名誉教授(皇室研究)は「未来の象徴が何を学ばうとしていいのかを説明し、理解を求めるべきだ」と指摘する。

悠仁さまの教育は、秋篠宮家の意向で公費を支出できる学費も私的な支出に充てられる「皇族費」で賄われ、宮内庁の関与は限られてきた。だが、義務教育を終えて高校に進めば、従来より「公」を意識し

帝王学から象徴学へ

皇室は古来、皇位継承者に特別な教育を施してきた。平安時代には、唐の太宗が皇帝の心得を説いた「帝範」や延臣との問答集「貞觀政要」が「帝王学」の教科書として使われるようになった。人の上に立つには、「仁義を備え、学問に励むこと」という中国伝来の備えが学ばれ、自らの体験を伝えた天皇もいた。鎌倉時代、順徳天皇が日常の心得を著した「禁秘抄」や花園天皇が皇太子に書き与えた「誠太子書」が有名だ。

近代には、立憲君主制下の富国強兵を意図して洋学や法学も採用された。学習院院長に乃木希典、東宮御学

問所総裁に東郷平八郎が就任し、昭和天皇の教育には軍人も参画した。

戦後の民主主義の下で、英国王ジョージ5世の伝記を讀み、天皇と国民の新たな関係について学んだ上皇さまは、帝王学に代わる「象徴学」という考え方を示された。

父祖の生きた時代から学ぶことを重視し、先の大戦の歴史や象徴天皇制を定めた新憲法をテーマにした専門家の「進講」を、今の天皇陛下と一緒に受けられた。悠仁さまも、上皇さまと共に過去にたり、被爆者の体験を聞いたりする機会が、秋篠宮さまの配慮で設けられてきた。

戦後、天皇の事績を学校で習う「国史」の授業は廃止されたが、皇室では、歴史学者を招いての「進講が続いている。天皇陛下は、災害や疫病戦乱の時代も国民に寄り添った聖王、峻厳、後奈良歴代天皇の姿に学ぶことの大切さに言及されている。

所功・京都産業大名誉教授(皇室制度文化史)は、天皇家の長女愛子さま(20)が3月の記者会見で、成年の自覚をしっかりと語られる姿を見て、皇族が身近な人から立ち居振舞いを学ぶ重要性を再認識したという。令和の皇室は、天皇の弟が皇位継承順位1位、おいが同2位という構成になったこと、親から子へと圖書が伝わってきた象徴教育のあり方にも工夫が必要だ」と指摘する。